

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

## 英語教育：私のリスニング指導の実践報告 ：映画と音楽を使って

田中，長子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

111

(開始ページ / Start Page)

129

(終了ページ / End Page)

140

(発行年 / Year)

2000-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005492>

# 英語教育：私のリスニング指導の実践報告

——映画と音楽を使って——

田 中 長 子

## クラスの現状と背景

毎年学期初めに学生に自己紹介文と英語に関するアンケートを書いてもらう。その中で目立って多いのが「私（僕）は英語が嫌いで苦手ですからよろしくお願いします。」というくだりである。日本文化特有の謙遜した表現ということを考慮しても、中学、高校と合計6年間英語の勉強をしてきた学生のうち75%以上もの人が自信を失い英語に興味を示さないのは異常な事態といえる。そして「英語は嫌いだけど一生懸命頑張るので単位をください。」と続くのである。英語の4技能のうち何が嫌いで苦手なのか尋ねてみると、リスニングとスピーキングが出来ないという答が大半である。どんな勉強法をやっているのか、またどんなふうに克服しようとしているのか、どんな努力をしてきたのか聞くと特に何もしていない状態なのである。

リーディングとライティングは問題がないというので英字新聞のスポーツ欄のコピーを渡し、一読させた後、野球の試合結果やNBAやテニスの勝者や選手の名前、何勝何敗か、どういう試合はこびであったかなど次々に質問してみる。しかし英字新聞を始めて手にする学生も多く、見出しの解釈がやっつとで難しい単語を辞書で調べないとわからないのに先生はむちゃな質問をすると逆に怒るのである。夕べ野球をTVで観戦した人はいないの？ テニス？ サッカー？ としばし英語を離れるとざわざわという私語の中から、ああだった、こうだったと試合状況が話題にのぼり、クラスがもりあがり、なごやかな雰囲気になっていくのである。国際化が叫ばれて久しいが、これがクラスの現状なのである。学生達は嫌々英語を勉強してきてリーディングもコミュニケーション英語もほとんど身につけていない。自分のために勉強してきたわけではなく、たださせられてきた、知識として習ってきた、点数の為だけに時間を

さいて暗記してきたようである。実に可哀想で役に立たない勉強をしてきたものだと思う。専攻が英語ではないとはいえ、モチベーションは点数をとって単位を満たすことで、言語の習得やそれを将来にいかすという視点に欠けているのである。第2言語習得のための態度と動機を研究した Gardner, R.G. & Lambert, W.E. (1972) の2つの motivation のタイプ、instrumental motivation (第2言語の習得をゴールにめざし、そこに到達することが動機) と integrative motivation (第2言語の国の文化や人に接触したい、その社会の一員になりたいという願望から言語習得に取り組む動機) の範疇にも入らない状態なのである。もっと上級を目指した assimilative motivation (第2言語の国に完全に同化し現地の人とみわけがつかなくなる状態をめざす動機) とは程遠く縁のない状態なのである。専門家の研究の対象からもはみだす始末なのである。

ではどうしてこうなってしまったのであろうか？ 日本が島国として他の国から独立している所以で人の往来が少なく、第2言語の必要性がなかったからだろうか？ それまでの英語の勉強が文学中心の訳読法で行われてきたからだろうか？ いずれにしろ、英語が世界共通の言語となった今、英語を無視することは出来なくなってきている。世界が一つの国と化した現代において、英語が出来ないと専門の文献を読むことや世界との取り引きやインターネットにさえ取り残されてしまうのである。時流にのり遅れないように文部省も1994年に学習指導要領をコミュニケーション中心に改定した。そして学校英語にオーラルコミュニケーションA, B, Cが導入された。しかし平成6年以後と以前の英語の総合力およびリスニング力に際立った学力差は見られないと高橋(1999)は述べている。クラスでの英語の学習(learning)を言語運用(usage)に高め、学生を自由自在な言語使用(use)まで指導し、第2言語習得(acquisition)に導いていくのは並み大抵の努力ではできない。Widdowson(1978)がいうように社会的必然性や教育目標よりも、やはり勉強する側の心の持ちようが重要である。学習者の動機と態度が習得を決定していく。

motivation を教育心理学の側面からさらに2つに分け intrinsic motivation (内発的動機) と extrinsic motivation (外圧的動機) に分類して Gardner, R.G. & Lambert, W.E. の第2言語習得論を広範囲に活用した学者がいる。Kathleen Bailey の“Motivation Dichotomies”である。この分類法は Brown(1994)によると、Integrative intrinsic motivation (第2言語圏で

生活することを目標に自発的に言語習得する：例えば移民や結婚など）、Integrative extrinsic motivation（自発的ではないが第2言語を獲得させようと外部から動機づけをする：例えば親が子どもを英会話学校に行かせる）、Instrumental intrinsic motivation（第2言語を使いこなすことを目標に自発的に獲得する：例えば仕事のためや留学目的）、Instrumental extrinsic motivation（外からの圧力で強制的に言語を獲得させられる：例えば日本の企業が社員を語学留学させる）の4通りの動機に分類している。

私の学生の勉学態度はまさに Instrumental extrinsic motivation または Integrative extrinsic motivation というカテゴリーに入る。強制的で親の勧めや、入試のため、成績や単位取得といった報酬を媒介にした外圧的動機（extrinsic）による受動的な勉強法なのである。楽しみも興味もなく自発性もない。そのような勉強は暗記中心にならざるを得ない。こんな動機から生じる勉学態度は嫌い、辛い、苦手、やる気がない、成績も悪い、逃げ出したいなどマイナス面が強調され、結局身につかないということになりはしないだろうか？

この現状を打破するには、理想である Assimilative motivation に到達するのが一番だが、少なくとも Integrative (intrinsic) motivation に近づく必要がある。最大限に譲歩しても、気持ちを切り替え Instrumental intrinsic motivation な姿勢で勉強に取り組む必要がある。すなわち目標（夢）を持ち、その実現に向かって楽しく努力し、興味を持って自発的に勉強する方法に切り替える必要があるのである。そして英語をやってきよかったという満足感、成就感が味わえたら最高である。この場をかりて微力ながら私のクラスの取り組みを紹介したい。

## テーマと教材選び：

学生一人一人にしっかりした目的意識や動機、勉強する範囲を明確にするために次のような質問をした。なんで英語をやるのか？ 何のために英語をやるのか？ どんな英語をやるのか？ やりたい分野は何なのか？ すきな分野は何なのか？ やれそうな範囲はどこまでか？ この一年の英語の勉強のゴールは何なのか等である。学生の希望は、「英語圏に出かけて行って英語を実際に使って友人を作ったり生活がしたい。」、「映画を英語および日本語の字幕に頼

らずそのまま見て理解したい。」というものだった。時間の制約や人数の関係などから私が自信を持って教えられる範囲はあくまで基礎的なことであること。学生の英語力を確実に伸ばすにはそれだけの覚悟と努力が必要なことなどを話し合った上で、映画を使って授業をすることに決定した。理由は生きた英語に触れられること。万国共通の話題や情報が得られること。楽しく見られるし勉強できること。くり返し見れること。映像、音声、英語の字幕を使ってリーディング、ヒアリング、カルチャー（異文化体験）が学べること。登場人物に感情移入することで違う人生体験ができること。人間関係や社会問題など様々な問題が勉強できることなどによる。使う映画は「タイタニック」、「陽の当たる教室」、「イマジン」、「マイフレンズフォーエバー」、「ロミオとジュリエット」、「今を生きる」などを用意した。これらの作品を選んだのは一部または全部を鑑賞することによっていろいろな形の人の愛をテーマにしたいと目論んだからである。「タイタニック」では男女の愛を、「陽の当たる教室」と「イマジン」は父と息子の愛を、「ロミオとジュリエット」は敵どうしの中の男女の愛を、「今を生きる」は友情と師弟愛を、「マイフレンズフォーエバー」は母と息子の愛と友情をテーマに人生についてより深く考え、感じてほしいと意図したのである。

### 英語字幕付き映画：

人気ナンバー1の映画「タイタニック」を手始めに鑑賞することにした。英語字幕（キャプション）を画面に呼び出し、目で映像と英語字幕を追いながら同時に耳で音声英語を聞き取り理解するという作業である。イヤホンをつけ、初めは喜んで一生懸命食い入るように画面を見つめていた学生が20分後ぐらいからしきりにあくびをするようになり、イヤホンははずしてしまい、机にうつぶせに寝てしまうようになった。クラスの半数以上が集中力がぎれた状態になったのでビデオを止めて理由を聞いた。すると「目で読む英語と耳から聞く英語は同じ文章でも同じものとは思えない」、「映画のように自然な早さで話される英語は聞き取れない」、「英語字幕の速読は無理。」と学生たちは日々言い、英語での映画鑑賞は不可能と諦めている。確かに、オーラルイングリッシュを聞き取るという問題を克服しないと、映画を理解するどころか楽しめない。学生達の耳は英語に対して難聴状態なのだから。では学生たちが抱える難問に

答は無いのであろうか？ 答はただ一つ，“習うより慣れろ”である。英語圏に暮らす人と同じ環境を作り英語漬けにすること—英語のイマージョンプログラム化—が英語難聴を治療し、英語をマスターさせる病院である。そこで確実により速く治療するために音声英語の特徴である強弱リズムや音変化を音楽を使って指導することにした。音楽で耳を慣らし、英語難聴を改善することで英語圏の人と同じように映画を見て楽しめるようになるはずである。

ではなぜ生の英語（音声英語）が聞き取れないのだろうか？ 学生が指摘したようにリスニングの難しさは次の4点にある。

1. 耳慣れていない。つまり速度が速すぎてついていけない。
2. 区切りのない英語（くずれた音声英語—生きた英語）は単語を逐一発音する学校英語では理解できない。
3. 単語力不足のため発音を聞いても意味に結びつかない。
4. 文字で書いたものは繰り返し読めるが、音声英語は消えるので理解できない。

英語難聴という障害を乗り越えリスニングをマスターするのはどうしたらいいのだろうか？ 私はその解決策として音楽を利用するのがいいと考えた。その根拠は次の5つの理由による。

1. 英語の特徴は強弱リズムが交互に表れ音楽のリズムに合致する。
2. 学生は生まれた時からコマーシャルや子守歌など音楽に囲まれて育ち、音楽が好きであると同時に音感が発達している。
3. 言葉の持つメロディーがその国特有の音楽を作り出している。例えば独語がリードや行進曲を生み出し、仏語がシャンソンを、英語がポップスやバラードを、米語がジャズやカントリーソングというように、1. と共通しているが少しニュアンスが違う。田中（1995）
4. 日本語は子音がすべて母音と結びつき音となる言語であるが、英語は子音に有声音、無声音の区別があるように、音を出さない無声の子音が沢山ある。音を全部発音し、聞いている日本人の耳には音が無く母音とも結びつかない無声の子音で終わる英語を聞き取ることは不可能に近い。慣れる必要がある。音楽ではメロディーにあわせ歌うので少し聞き易い。
5. 車の運転やコンピューターの操作と同じように知識ではなく身体で覚えないと使えないのが会話である。その定着に音楽が有効な働きをする。

以上のことから音楽を利用して音声英語をマスターするのが最良の方法だと考える。それで学生のリスニング力が高まり、学校英語の世界（書き言葉）から生きた英語の世界（話し言葉）へと移行できれば大成功である。ぜひ橋渡しをして language learning を language usage に広げ language use というゴールに到達させ acquisition を完成させたい。次にその指導法を紹介する。

### リスニングスキルの指導：

基礎編として「ジャズチャント・フォー・チルドレン」やポップソングなどから 5 W 1 H の簡単な疑問文や平叙文の歌を選びテープで聞かせ、ディクテーションさせる。どう聞こえたかを学生に発表してもらい板書する。正解をビューアーで提示しながら違って聞こえた音声英語の原因と理由を音声学を用い理論的に説明する。学生が納得し脳に定着するまで何回もシャドウイングさせる。リズムに遅れないように、正確に真似ることで英語特有のリエゾン、強弱アクセント、リズム、イントネーションなどが修得できる。この 5 W 1 H を聞き取り発音できることで英会話の基礎が学べる。また会話の大部分が理解できるようになる。理解できると自分でも話したい誘惑にかられる。その結果、英語に対する恐怖心が消え、自信も生まれ、自発的に楽しく勉強するようになる。またメロディーと言葉を一緒にインプットする事で、英語を一度頭の中で日本語に置き換えて（翻訳して）理解する悪習を断ち、耳から受信した英語をストレートに理解していく直聴直解の習慣が育つ。

さらに同じ歌詞を使用して、英語に特有な音変化の特徴（音の弱化や脱落、リエゾンや同化など）を理論的に具体的に説明する。早口言葉を用いて音変化が実際におこる過程を体験させる。音声英語では強くハッキリ長く発音される単語が意味を伝える内容語（名詞、形容詞、動詞、副詞からなる）であることを理解させる。その部分だけ集中して聞けば意味がつかめることを体験で理解させる。弱く速く不明瞭に発音される箇所は意味に関係ないが、文を作るための機能語であること、単語が繋がったり省略されたりしているが内容理解には関係ないことをわからせ安心させる。強い音と弱い音が交互に表れるという規則があり、その繰り返してリズムが生まれることなどを教える。慣れてしまえば、s（主語）+ v（動詞）を聞いただけで話の筋が予測できるようになり、頭の中で自分の返答を考え出す余裕ができることなどを悟らせる。とにかく英

語は簡単な言語で世界中の人が話せる言語であることを了解させ安心させる。このようにボトムアップ式でリズムに乗り楽しみながらリスニング力を高めると、英語難聴も徐々に回復し、映画の急テンポの英語も耳で自然に理解できるようになる。

音楽を使ったリスニング力指導は授業の前半30分にとどめ、後半は先にあげた英語字幕付き映画を見て聴解力を定着させる。

#### 実験：

リスニング指導をしたクラスが本当にリスニング力が上がったかどうか調べるため社会学部の1年生2クラスを対象に調査実験をする。

指導期間：1998年4月～12月まで（週1回90分、計22回）

被験者：社会学部1年生2クラス：ヒアリング指導をした後英語字幕付き映画を見るクラスを実験群として1クラス（41名）と特別なリスニング指導をしないで英語字幕付き映画を見る統制群クラス（41名）1クラス。

教材：キャロライン・グレアムの「ジャズチャント・フォー・チルドレン」、歌のテープ、教科書「エアークラブス」、キャプション付き映画、「マイフレンズフォーエバー」、「タイタニック」、「陽の当たる教室」、「イマジン」、「今を生きる」など。

使用教室：L1教室。L1機器使用。

キーワード：シャドーイング、ディクテーション、インプット理論、ボトムアップおよびトップダウン理論、イメージングプログラム

音声学用語：強勢語、弱勢語、内容語、機能語、英語のリズム、イントネーション、リエゾン、音の脱落、同化など。

研究目的：学生の英語リスニング力を音楽や映画を使って高める



仮 説：正しいリスニング指導をすれば学生のリスニング力が上昇する。  
 学校英語（一語一語ハッキリ発音する英語）から生きた英語に変換できる。英語を映画で学び興味を抱くと学生の動機や態度が変化し、英語がすきになり自信をもつようになる。

#### 方法：

学期初めにプレテスト（図表参照）として3種類の単語の聞き取りテストをする。テストAはアメリカの文化を紹介した教科書のテープを使用したテスト。テストBは映画「マイフレンズフォーエバー」の台詞使用のテスト。テストCは歌のテープを利用した歌詞のテスト。成績を調べる。大差ない成績の2クラスのうち1クラスを実験クラスに選び、もう1クラスを統制群クラスとする。授業の前半30分間、実験クラスは歌やチャントを用いて上述のリスニングの特別訓練を行う。強勢語（内容語）や音の変化を特に意識した聞き取りをやり、シャドウイングも念入りに行う。統制群クラスは前半30分間リスニング教材「エアージュース」を使用する。中間の30分間は両クラスともに英語字幕付き映画を視聴する。残りの30分間は両クラス共に映画の台詞の和訳をやる。（図表：授業の進め方参照）

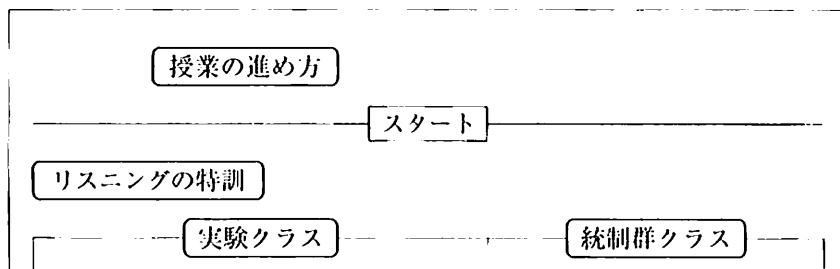
#### プレテスト

テストA：単語の聞き取りテスト（教科書から出題）

テストB：単語の聞き取りテスト（映画「マイフレンズフォーエバー」から出題）

テストC：単語の聞き取りテスト（歌のテープから出題）

#### 授業の進め方



リスニングテープ(歌またはチャント)の デイクテーション 答を説明 強勢語(内容語)のチェックと確認	教科書 Air Waves を使った リスニング
30分	
映画を使用したリスニング	英語スクリプトの配付 単語と慣用句の説明 英語字幕付き映画を鑑賞する
60分	
復習コーナー	英語スクリプトの和訳や文化的 背景を学生が発表する
終了：90分	

ポストテストとしてプレテストと同じテストB, Cを年度末に行う。その差でリスニング力がどれだけ上がったかを調べる。学期初めに実験クラス、統制群クラス共にテープに教科書の英語の一部と映画の台詞の一部をシャドウイングさせ録音される。年度末に同じ箇所をテープに吹き込み聞き比べる。学生個人の英語の発音、リズム、イントネーションの成長の跡が測れる。

結果：

リスニング指導した実験クラスはリスニング力が伸びた。(表1, 2参照) テストBがプレテスト30.3からポストテスト75.2になり約2倍以上の成績になった。テストCもプレテスト53.6がポストテスト78.3になり24.9点も上昇した。聞くことが出来なくて残念だがシャドウイングのテープも後期には流暢な英語になり、帰国子女に聴いてもらったならネイティブと変わらないという褒め

言葉をもろう学生も出現した。統制群クラスもそこそこ伸びたと言える。(表1, 2参照) 教科書がリスニング用なので顕著ではないが成長の証が見られた。テストBがプレテスト30.6からポストテスト52.6になり22点伸びた。テストCがプレテスト50.4からポストテスト65.9になり15.5点伸びた。2クラスのテストBの成績の違いはリスニング指導に音の変化を導入したかしないかで変わったのではないかと思う。映画の英語の聞き取りなので大差が出た。テストCは学生の得意な歌の聞き取りなのでテストBに比べ成長の度合は低かった。

表1 テストA, B, Cの平均値(プレテスト)

	テストA	テストB	テストC
実験クラス	68.1	30.3	53.6
統制群クラス	67.8	30.6	50.4

表2 テストB, Cの平均値(ポストテスト)

	テストB	テストC
実験クラス	75.2	78.3
統制群クラス	52.6	65.9

### 結論：(学生の感想から抜粋)

音楽を使ってリスニング指導した結果、学生の英語力が伸びた。音声英語をそのまま理解する習慣がついた。英語が大好きになった。英語に自信がついた。トーフル、英検、トーイック等を受験する学生が増えた。発音が英語らしくリズムカルになった。映画やインタビューテープの速度が速くつながった音の英語でも理解できるようになった。歌はメロディーだけでなく歌詞を味わうようになった。英語を聞き話すのに少し抵抗が無くなった。映画がキャプションだけでも面白く観れるようになった。このように学生の感想が成長の証を語っているのだから、問題点も残っているが仮説は計画どおり証明されたと思う。最初から英語がすきで積極的に取り組んできた約10%の学生は夏休みにトーフル(500点を越えた)や英検(準1級)を受け、将来の夢に向かって前進している。

## リスニング指導の成果：実験クラスの感想から

指 導 前	指 導 後
英語大嫌い	英語が大好きになった。英語が聞こえて来ると聞き耳を立てる。一日一回は英語のシャワーを浴びる。
棒読みの発音	発音がとても英語らしくなった。なめらか、流暢になりリズムカルになった。内容語も自然に強く言うようになった。
映画好き（但し日本語字幕）	映画大好き、英語字幕も抵抗がない。
英語のキャプションが読めない。	短い文、10単語くらいまでは読める。
台詞が耳に入っていない。	耳から台詞を聴くと同時に目で英語の台詞が確認できるようになった。
映画の台詞なんて覚えられない。	短い印象深い台詞が自然に口から出てくる。
英語が話せない	何か話したい話せそうな感じ。
歌の歌詞の聞けないので興味が無い。	歌われる歌詞も鑑賞するようになった。
英語のインタビューは難しくて聞けない。	英語の感覚が働くようになり、内容の見当が付く。
聞き取りヒントがある場合もあまり確信が持てない。	はっきり内容がわかる。好き嫌いや感想、意見が言える。

## 問題点：

- 時間が足りないのでスピーキングができない。
- 一人一人の力がどれだけ伸びたか見てあげられない。
- ペアワーク、グループワークなどのクラスの交流が少ない。

## クラスの雰囲気：

リラックスしている。楽しんでいる。熱心に映画を見ている。積極的かつ自主的に英語を勉強している。自信を強めている。友人や先生を信頼しコミュニケーションしてくる。

感想：

クラス全員の英語力が伸びた。リスニング力が音画どうりにのびた。生徒の考える力も伸び大学生らしく成長した。

〈参考文献〉

- Brown, H.D. (1994) *Principles of Language Learning and Teaching*. Englewood Cliffs: Prentice Hall Regents.
- Gardner, R.C. & Lambert, W.E. (1972) *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley: Newbury House Publishers.
- Krashen, S.D. (1981) *Second language acquisition and second language learning*. Oxford: Pergamon.
- Widdowson, H.G. (1978) *Teaching language as communication*. Oxford: Oxford University Press.
- 角山照彦 (1997) 「米国におけるクローズド・キャプション研究の成果と日本の英語教育」『映画英語教育研究』第3号, 3-14。
- 菊地俊一 (1997) 「日本におけるキャプション教材の研究について」『英語英語教育研究』第3号, 15-25。
- 高橋宏 (1999) 「オーラルコミュニケーション導入でリスニング能力は向上したか」ATEM Newsletter No.6, 1
- 田中長子 (1995) 「日本語と英語——言葉の成立と文化の特徴——」法政大学教養部『紀要』第92号, 103-116。
- 広瀬浩二 (1997) 「映画使用が学習者の動機づけに及ぼす影響」『映画英語教育研究』第3号, 50-61。
- NAKANO, Hideko (1997) "Production of Stress-related Durational Patterns in Japanese EFL Learners." *Language Laboratory*, 34. 1-11.
- 鈴木広子・保崎則雄 (1997) 「字幕付映像の理解を高める提示方法についての一考察」*Language Laboratory*, 34. 53-73。
- 柳原由美子 (1995) 「英語聴解力の指導法に関する実験的研究——シャドウイングとディクテーションの効果について——」*Language Laboratory*, 32. 73-89。

この論文は 12th World Congress of Applied Linguistics: AILA '99 Tokyo で発表したものを加筆訂正した論文です。